



牛の肺、腋窩リンパ節および胸骨骨髄における白血病性変化

岩手大学農学部家畜病理学教室出題

第9回獣医病理学研修会 標本No.125

本例はホルスタイン雌牛、6才、妊娠5ヵ月の高等登録牛。昭和43年4月7日初診。当時、食欲は普通であったが元気消失し、肺音はやや微弱でラッセル音をきく。前肢上膊部から前胸部にわたり、拳大の無熱、無痛の腫脹を認め、歩行時、前肢を開張し、歩行は緩慢であった。腋窩部の腫脹は次第に増大して人頭大ぐらいとなった。同年5月12日と殺解体された。

肉眼所見：(1) 左側腋窩リンパ節部は全体として約人頭大に腫脹し、圧するに硬く、断面は灰白色無構造で所々に出血を認める。(2) 肺肋膜は灰白色肥厚気味で、肋膜下に大小多数の灰白色結節を認める。断面では実質内全般にわたり、大豆、蚕豆、鳩卵大など、大小の灰白色、ほぼ球形の結節が多数認められる。肺実質は暗赤色、水腫性を示す。(3) 胸骨においては全体にわたり、各骨髄の中央部にやや弾力に富む灰白褐色の結節様物を入れる。

組織学的所見：(1) 肺臓：肺肋膜直下における腫瘍細胞は一般に紡錘形を呈しているが、さらに深部に向うに従って、このような細胞は減少し、多くは類円形の核をもった細網細胞様となる。また、腫瘍性増殖巣内の所々に、管腔または嚢胞様空隙を形成し、これらの腔内に腫瘍細胞が充満し(図1, H-E, ×120),あるいは一部では管腔内にリンパ液様物を入れている。さらに、気管支腔内や一部の肺胞内にも腫瘍細胞が侵入増殖している

像もあり、病巣周囲の肺胞は水腫を示す。細網線維は腫瘍細胞間に多少増生し、網眼を形成している。(2) 腋窩リンパ節：固有構造は全く消失し、腫瘍細胞がビマン性に増殖し、その配列は粗で索状ないし網状をなし、所々にリンパ管様空隙を形成している。腫瘍細胞の核は円形または紡錘形を呈し、原形質に富む。なお、これらの細胞間に多数の多形性巨細胞を混じ、この巨細胞の原形質は強エオジン好性に染む(図2, H-E, ×520)。細網線維の形成は部位によって様ではないが、ある部位では、かなり明瞭に増生していた。胸骨骨髄：(1) 造血巣がまだ、ある程度健全に保持されている部位では濃縮核をもった巨細胞が所々に散在している。(2) 腫瘍細胞がビマン性に増殖している部位では細胞の形態は多くは紡錘状でその配列は粗であり、紡錘形細胞肉腫様を示す。(3) 腫瘍細胞が密に集結している部位では細胞の核はクロマチンに富み、円形または紡錘形を呈し、それらの細胞は明瞭な索状あるいは渦巻状の配列を示している(図3, H-E, ×190)。

組織学的診断：肺臓および腋窩リンパ節の所見上、多形細胞型細網肉腫か、多形細胞型細網内皮腫または細網内皮肉腫と診断されるが、胸骨骨髄の所見とあわせ、腋窩リンパ節および肺臓に転移病巣を伴った骨髄細網内皮腫ないし細網肉腫と認めるのが妥当かと考えられた。